

◆ 第六話 身代り名号

(昭和29年10月20日掲載)



「今頃から何処へ行く。」と聞くと、決まって「お説教を聞きに。」と云う。毎月一日と十五日は、決まって夕方になるとどこかへ出掛けて行くので、甚三郎は妻のお沢に対して疑惑の眼を向けだしたのは、そんなことが一年余り続いた、つい近頃だった。

飲んだくれの弟甚吾は、酒を飲まない様にといつも意見するお沢が、目の上のこぶみみたいに邪魔だった。

「よし、いつもやりこめられるから、一つ之を機会に、お沢をこらしめてやれ。」という気持ちから、お沢がいそいそと出掛けた今夜、甚三郎にこう話し掛けた。

「兄貴は、お沢姉さんをどう思っているさ。」

「どうしてそんな事を聞く。」と甚三郎はいう。

「その事でござんすよ。お沢さんには、いい人が出来て、決まって会う約束がしてあると云うことをわしはちゃんこの耳である人ら聞いたんで。」

と云う言葉に甚三郎はいきり立った。

「それはほんとうか。」と云うと「嘘だと思ふなら。」と首を掛けた風をしたので、気の早い甚三郎は奥の間から「ナタ刀」を取り出すや否や、甚吾の止めるのも聞かず、家を飛び出した。

甚吾は「之は少々薬が利きすぎたかな。若しもの事が無ければよいが。」と矢張り心配になった。怒り狂える甚三郎の心はただ嫉妬と殺伐の焰（ほのお）ばかりが縦横にみなぎっている。

物のはずみにナタ刀を手を持っていることが、そうさせたのかも知れない。否、内気なので一年余りの心棒が積もり積もって、こんなに血相を変えさせているのかも知れない。兎に角物すごい形相である。川向うの河原から、その時草履の音が聞こえてきた。

橋を渡る女の姿が、暗にもくつきりと近づいてきた。草むらの中にあつて、甚三郎は胸をどきどきと躍動させた。「うぬ、ばいため」お沢の脳天も割れよとばかり打ちおろしたのであつた。お沢はあけに染まって倒れたようにあつたので、甚三郎は茫然と血刀を下げて、吾（我）が家へ帰つたのである。帰るなりどっと床に上に打ち倒れて気を失ってしまった。

幾刻かが過ぎて、我にかえつた時、甚三郎はやさしいお沢の手で甲斐甲斐しく介抱されていた。甚三郎は「キャッ」と叫んで打ち倒れたお沢の姿とべつとりと血潮にしみたナタ刀を思い出して慄然とした。「おお、お沢や、おめえはほんとうに人間かい。いや幽霊じゃ、幽霊に違いない。」と云うと、お沢は「あんたまあ、気でも狂はんしたか。」とさも何事もなかった様子である。

甚三郎は思い切って事に次第をお沢に尋ねた。「一つ橋を渡ってから、お前は何事もなかったかえ。」お沢はようやく合点が行ったという面持でこう物語った。

「そう言えば橋を渡ってしまった時、生温かい風が吹いて来て、一寸目がくらんだが、それがそうでご座んしたか。」と云い「そう言えば、まあ一つ変な事があります。」と口をつぐみ暫くして「蓮如上人様御真筆の南無阿弥陀仏の『六字の名号』が、いつも仏壇に掛けてあるのが、今日に限って掛けてありません。和尚さんに尋ねよう尋ねようと思いながら、そのままにして帰りました。」と云った。

あまりに不思議なお沢の物語に、甚三郎は現場に行ってみようと云うことになった。草も地も石ころも、鮮血に染まっている。あたりには無気味な空気が漂い、甚三郎とお沢は思わず目をつむり合掌した。お沢の死体のあとと覚えしき所には『六字の名号』の南無と云う二字から、袈裟がけて血潮をあび、切り下げられて有るではないか。甚三郎とお沢はその御名号を押し頂いて善正寺へと急いだ。道珍という住持は「実は今夕仏壇に掛けようと思っていた御真筆を入れてある箱をあけたのですが、そこにはないのです。日頃なら大騒ぎする所ですが、今夜に限ってその事が別に気がかりにならず、お説教を聞きに来た人も誰も気付かないという事が不思議です。それではお沢さんの厚い信心と主人思いが通じて身代りになったのでしょうか。いずれも尊い人命が救われたのですから、こんなにうれしい事はありません。」と云った。

甚三郎は、その事があってから何事も慎重に考えて早合点しなくなり、お沢に対しても疑いを掛けなくなり、せっせと石屋の仕事に精出しました。(完)